

大学というものの観念 The Idea of a University

マイケル・オークショット
桜井直文訳

わたしがいつも好んで言っている説があります。それは、「理念」とか「目的」ということばで人びとが呼んでいるものはけっしてそれ自体、人間の活動の源泉ではない、ということ。というのも、そうしたことばで呼ばれるものは、[人間の]行為というものを真になりたせているものを切りつめて表現しているだけなのであって、[人間の]行為とは、あることをなすときの[身心の]構え disposition であり、それをどうなしたらいいかということについての知識だからです。人間というもの human beings は、実現されるべき目的にこころひかれるときにだけ、休息からたちあがって活動しはじめる、というわけではないのです。生きていくということは、たえず活動的であるということです。われわれが特定の種類の活動に帰属させている目的なるものは、このあるいはあの活動にどのようなしかたでかかるとかということについてのわれわれの知識を要約したかたちで示しているものにすぎません。

このことはたとえば、われわれが「科学」と呼ぶ活動においてあきらかにそうです。科学的な活動とは、あらかじめ考えぬかれた目標なるものを追求することではありません。というのも、その活動がいったいどこにたどりつくのか、だれも知らないし、また、想像することもできないからです。[科学においては]われわれがこころのなかにあらかじめ想いえがくことができるような完成されたすがたなどないのです。つまり、それによってわれわれが現在どの程度まで到達したかを判断する規準としてたてることのできるような完成されたすがたなどないのです。科学を科学としてなりたせているもの、そして、科学にその動力と方向づけをあたえているものは、到達されるべきものとしてあらかじめ知られていく目的ではなく、科学的な探究をどのように遂行したらいいかということについての科学者たちの知識です。科学者たちがおこなう個々の追求やうちたてる個々の目的は、そうした知識にうえからおしつけられるものではなく、そうした知識のなかから生まれでてくるものです。あるいは、もうひとつべつの例をだしますと、料理人[コック]とは、まずはじめにパイについての構想をもち、しかるのち、その構想を実地にためす者のことではありません。というのも、料理人とは、料理法[コック術]に熟達した者のことであって、かれがつかろうと思うものや実際につくりだしたものは、かれのその熟達からうまれでてくるものだからです。あるいは、第三の例をだしますと、ひと、人生においてなすべき「使命」が自分にはあるのだと思うかもしれません。そして、自分の活動は、その「使命」によって支配されていると思うかもしれません。しかし実際は、逆なのです。とるもの、かれのいわゆる使命にもとづく活動は、どうやったらある一定のしかたでふるまえるかということを知っている、ということなのです。また、そういうしかたでふるまおうとつとめる、ということなのです。かれが自分の「使命」と呼んでいるのは、かれのこうした知識や努力を切りつめて表現したものにすぎないのです。

そういうわけで、今日、大学の「使命」だとか「機能」について語られていることは、どうも理解できないのです。というのも、そうしたことばで言わんとしていることがなんであるかは理解しているつもりなのですが、そうした言い方が、わたしには、不幸な語りかたのように思われるからなのです。こうした語りかたが前提としているのはつぎのようなことです。すなわち、「大学」と呼ばれるなにかがあって、それは、ある種の「なんらかの目的のためにつくられた」装置であり、十分なお金があればそこからなにかべつものをつくりだすことができるようななにかであり、「それはなんのためにあるのか」という問いが意味をもつようななにかである、ということです。そして、今日の諸大学にたいする批判のひとつは、それらの「機能」が、そうであってしかるべきほどには明瞭ではない、ということです。[こうした批判にたいして]わたしはまったく驚きません。われわれの大学において批判されてしかるべきことは山ほどあります。しかし、大学の「機能」が明瞭でないからといって大学にケチをつけることは、大学というものの性格をとりちがえることです。大学とは、ある特定の目的を実現したり、ある特定の結果をうみだすための機械ではありません。というのも、大学とは、あるしかたであらわれた人間の活動 a manner of human activity だからです。もちろん大学が、ある特定の目的を追求しているのだといって自分を宣伝することが必要になることもあるかもしれません。しかしそれは、そうしたことを語る相手があまりにも無知なので、かれらにたいしては、赤ちゃんコトバで話してやらなければならない場合や、大学が、自分のところにやってくる人びとをうけとめる自分の能力についてほとんど自信がもてなくなってしまっている場合にかぎります。しかし、わたしの印象では、われわれの諸大学は、こうしたことが必要になるほどには、まだ落ちぶれていません。それらは、自分たちが「なんのために」あるか知らないかもしれませんが、自分たちの「機能」についてきわめてほんやりした考えしかもっていないかもしれません。しかし、それらは、そうしたことよりはるかに重要ななにか、すなわち、大学が大学であるためにはどんなふうにして仕事をしたらいいか、ということにまちがいに気づいているとわたしは思います。この知識は、[その当事者にあたえられた]自然の賜物ではありません。というのも、それは、ひとつの伝統の知識であり、獲得されなければならないものであり、[したがって]つねに、誤謬や無知とまじって、ときには失われてしまうことさえあるものだからです。しかし、この種の知識(そうした知識が完全に失われてしまったことはないかとわたしは信じます)のなかに分け入ることによってしか、大学の「観念」と呼ばれるものをわれわれが発見することは望みえないのです。

ひとつの大学とは、ある種の活動に従事する一定の数の人びとのことです。中世においてはその活動はストゥディウム Studium [努力/研究]と呼ばれました。われわれはその活動を「学びをもとめること pursuit of learning [学問の探求]」と呼んでもいいでしょう。この活動は、文明生活 a civilized way of living の特質のひとつであり、まことにその徳のひとつなのです。というのも、学者は、詩人、聖職者、兵士、政治家、そして、商人とならんで、文明社会のなかでその場所をもつからです。しかし、大学は、こう

した活動を独占しているわけではありません。自分だけの研究場所をもつ隠遁の学者、ある特定の学問分野で有名なアカデミー〔専門学校〕、年少の子どもたちのための学校、それらもまた、それぞれ、この「学びをもとめる」という活動に参加していますし、それぞれにおいて尊敬されるべきものです。しかし、それらは大学ではありません。大学を「それらから」きわだたせているのは、学びをもとめることにある特殊なしかたで従事しているということなのです。大学とは、それぞれがある特殊な学問分野〔の研究〕に献身している学者たちの団体 a corporate body なのです。すなわち、大学に特徴的なことは、ひとつの協同的なくわだて a cooperative enterprise として、学びをもとめるということなのです。この団体の構成員は、世界中にちらばっていて、ときに会ったり、あるいは、まったく会わなかったりという人びとではありません。かれらは、おたがいの近くにいつも住んでいます。したがって、われわれが大学について考えるとき、それをひとつの場所分として考えることをやめてしまったら、大学というものの性格それ自体をなしている部分を無視してしまうことになるでしょう。そればかりでなく、大学とは、学びの根拠地 a home of learning なのです。すなわち、学び〔学問〕の伝統が保存され、〔未来にむけて〕おしひろげられる場所であり、学びをもとめる〔学問探求の〕ために必要な装置が集められてきた場所なのです。

大学を構成する学者たちのなかでも、ある人びとは、その余暇をそっくりそのまま学び〔学問〕に献げることが期待されています。そして、かれらの同僚たちは、かれらと会話することでもかれらの知識にふれられる利得をもち、〔外部の〕世間も、おそらく、かれらの書いたものから利益をえます。この種の学者のいない学びの場所は、大学とはほとんどの言えません。しかし、他の学者たちは、学ぶだけでなく、かれら自身が教えることに従事します。しかしここでもまた、かれらがなすのは、ある特殊なしかたでの教育的企てであるとして、それが大学を〔他の学びの場所から〕きわだたせているのです。教えられるために大学にやってくる人びとは、自分たちがたんなる初心者ではないということを示す証拠を提示しなければなりません。かれらのまえには、教師たちの学識が展示されるばかりでなく、研究のカリキュラムが示され、テストと学位授与がそれにつづきます。こうして、三種の人びとがわれわれが知っているような大学を構成することになります。すなわち、〔純然たる〕学者、教師でもある学者、そして、教えられるためにくる人びと、すなわち、学生 undergraduates〔学部生〕です。そして、これらの三種の人びとの存在と、かれらのあいだで成立している諸関係が、「学びをもとめること」とわれわれが呼ぶより広いくわだてのなかでの大学というものの〔他とは区別された〕きわだつた場所を決定するので

す。これら三種の人びとの活動を〔ひとつひとつ〕考えてみることにしましょう。そうした活動についてすこしでも知っているひとはだれでも、つぎのことを知っています。すなわち、学びをもとめることと、情報をえること acquisition of information とはちがうということです。これは微妙なちがいです。というのも、情報が十分でないひとは、学識ある learned ひとはまず呼べないからです。しかし、学者とは、たんにとるにたらない些末事を集めてまわるひとのことではありません。かれは、自分がもとめているものがなんであるかということについてなにごとかを知っています。またかれは、自分が知っていることと知らないことを区別することができず、「あわれな術学者 poor pedant」にたいた世間の侮蔑は、おおくの場合まちがっています。というのも、そうした侮蔑は、学者の活動をその有用性によって判断し、それが役にたたないようにみえるとき、それを術学的だ pedantic と思うからです。しかし、これはいつわりの規準なのです。というのも、非難されるべきなのは、直接役にたたない知識の追求でも、学問探究 scholarship においては避けられない細部へのこだわりでもなく、たんなる断片にすぎない学問の断片のあいだをなんのあてもなく手探りで歩き回ることだからです。学問探究はときにそうしたものに墮落することがあります。しかしこうしたことは、世間が考えるほどしばしばおこることではありません。むしろ、大学ほど、こうしたことがおこりにくい場所はほかにはないのです。

実際、学び〔学問〕の世界 world of learning をつくりあげるものがなんであるかを決定する単純なやりかたというものはありません。というのも、学び〔学問〕の諸部分を正当化すべきどのような明瞭な理由（たとえば、有用性といった）も見いだされえないからです。そうした諸部分が表現しているものは、〔そうした諸部分にさきだつて〕あらかじめ考えられている目的ではなく、ゆるやかに変化している伝統なのです。年月がたつにつれ、あたらしい諸研究が地平線のうえにすがたをあらわし、ふるい諸研究は、そうしたあたらしい諸研究と接触することによって若返ります。学者のひとりひとりが、ある意味での専門家であって、ある選択された領域を開拓しているということは避けたいことではありません。しかし、こうした領域がきわめて狭い領域にとじられていることはめったにありません。また、ひとりの学者はしばしば、ひとつの研究からつぎの研究へとくら替えし、かれの中心的な仕事ではないことがらにも鼻をつっこむことがあります。しかし、それにもかかわらずやはり、学びをもとめること〔学問の探求〕は、断片的なくわだてであるようにみえるかもしれません。そして、そのようにみえるのは、〔そうした学問探求が〕たんに外側からのみみられているからだと疑われるとしても、それでもなお、そうした〔学問の〕探求の全体に一貫性かつりあいある種のある種の統合力がもたらされているのではないかと、たずねてみることは、決して不自然なことではないように思えます。おそらくつぎのような問いがたてられるでしょう。すなわち、われわれにはある地図、すなわち、学びの世界の諸部分どうしの関係が明瞭に示されているような地図が必要ではないか。また、ちょっとした接着剤でもって全体をひとつにまとめるなら、そうした全体がもっとよくなるのではないかと、といった問いです。そして、こうしたことをもつよく感じているだれかが、諸科学のあいだの隙間に「文化」と呼ばれるネバネバするなにかを注入しにあらわれるということになるのです。しかも、きわめて必要とされているなにかを自分たちは供給しているのだという信念をもって。しかしながら、こうした診断も、また、その治療法も、悲しむべき誤解から発しているのです。

学びの世界は、それをひとつにするために、そこから注入されるセメントのようなものをまったく必要としていません。というのも、その世界の諸部分は、単一の磁場のなかで

動いているからです。そして、その隙間を埋める必要が生じるとすれば、それはただただ、[そこに流れていた]電流がいわれなく切断されてしまったときにかざるからです。学びをもとめること[学問の探求]は、競争者たちが最善の位置を争うレースのようなものではありません。議論することやシンポジウムのようなものではありません。それは、ひとつの会話 conversation なのです。そして、大学(すなわち、おおくの諸研究所としての大学)の特有の徳とは、そうした学びの探求を、この[会話という]性格において示すことにあります。すなわち、それぞれの研究は、[会話における]それぞれひとつの声としてあらわれ、その声のトーンは、暴君的でも悲嘆的でもなく、つつましく、会話に適した conversable トーンなのです。会話には、議長は必要ありません。あらかじめさだまったコースもありません。われわれはそれが「なんのため」の会話なのかと問うことはありません。そして、その会話の卓越性をその結論で判断することもありません。というのも、会話には結論はなく、会話はつねに他日にくりのべされるものだからです。会話の統一性は、うえからおしつけられるものではなく、語っているもろもろの声の性質からわきでてくるものです。そして、会話の価値は、それに参加する人びとのところにそれが残す余韻のうちにあるのです。

そういうわけで、学者とは、学びの活動に従事するしかたを知っているひとのことです。ですから、かれの本来の声は、説教者や[基本的な知識を教える]教師 instructor のそれではありません。しかし、学者のなかに教師 teachers がいるということ、そして、大学とは、なにかを学ぶことができるという期待をもってひとがいくところであるということとは、驚くべきことではありません。すべての学者がよい教師になる親和性をもっているとはかぎりませんが、しかし、ほんもの学者はすべて、本人がそれを意図するしないにかかわらず、学びのもとめかた[学問の探求の方法]についてかれの知っていることのかいばくなく、それがわかる人びとにたいして伝えるものです。かれの教える力がうまれでてくるみなもとは、かれの知識の力と靈感にあります。つまり、かれが、学びをもとめるといふことのなかにひたされているということのうちにあります。そうしたことは、学者になるうなどほとんど考えたことのない人びとにすら感じとられるものです。また、その学識と[教師としての]親和性が十分にあり、自分の知っていることを伝える能力をなみはずれてもっている人びとですら、完璧な[基礎知識を教える]教師 instructor とはちがう何者かであると考えられなければなりません。かれらは、もろもろの[学問的]規則を知っているという点で信頼できるかもしれません。しかし、かれらにとって、結論を教えることはさほど重要ではないのです。ある種の美術学校にいけば、ネコをスケッチするためのおおりの方法や、目を描く際におぼえておかなければならない一ダースもの技法を教えてもらえるかもしれません。しかし、教師 teacher としての学者が教えることは、スケッチしたり描いたりするしかたではなく、ものの見かたなのです。かれは自分の言いたいことを容易にことばにできるひとかもしれないし、また、自分自身の疑いやためらいをなかなか投げ捨てられないひとかもしれません。しかし、それがかれが学者であるということなのですが、ある特定の声をもたず語るといふことは、かれの[学者としての]性格には属していないのです。そして、かれは、つぎのような学び[学問]の通俗化とはいっさい関係をもたないでしょう。すなわち、学びをたんに試験に受かるための手段とみなしたり、資格証書をえるための手段とみなしたりするといったことです。

しかし、大学は、個々の学者の教える力をこえるある教える力をもっていると考えられるかもしれません。大学とは、その靈感をひとりの秀でた人間からひきだしているアカデミーではありません。というのも、大学とは、学者たちの団体 a body であって、かれらは、個人的であれ学問的であれ、さまざまな不完全さをもっていますが、おたがいのそうした不完全さをたがいにおぎないあっているからです。大学は、おおくのさまざまな種類の教師をかかえています。それぞれの種類の教師たちは、他の種類の教師たちとのまじわりから自分たちの力をひきだしているのです。自分の考えを容易にことばにできる才能を持ったひと[学者]に[なにかの機会に]われわれが推薦するとしましょう。かれは、すべての質問にたいしてととのった答えをあたえてくれるでしょう。しかしわれわれがこころにとめておかなければならないことは、かれは、たんにこのうえなく活発な精神をもった人間であるというだけでなく、しばしば、つぎのような人びとのスポークスマンでもあるといふことなのです。すなわち、自分の考えをことばにだすことはそれほどじょうずではないが、おそらくはより深い、そして、独創的な精神のもちぬしであって、かれは、そうした人びとと毎日接しているのです。すなわち、かれらがいなくなったら、かれもほとんど存在しえないのです。そういうわけで、大学とは、人類の弱さと無知にきわめてよく適合した制度なのです。なぜなら、その卓越性は、ひとりの万能の天才の登場に依存しているわけではないからです。たとえ、そうした天才があらわれたとき、そうした天才に場所をゆずるしかたを大学がわかまえていても、さらにつけかわえるならば、大学は、下院やふるくからおこなわれてきた商売においてと同様、なにかを、それをことばにだして教えるというのではなく伝えます。そして、そのようにしてそれが伝えるものなかにすくなくともあるのは、会話のやりかた manners of conversation なのです。

学者、教師、そして、最後にくるのが、教えられるためにやってくる人びと、すなわち、学生 undergraduate です。学生であるかれ、あるいは、彼女もまた、[他の大学構成員とはちがう]きわだった性格をもっています。まずはじめに、かれは、子どもでも初心者でもありません。かれはすでに、どこかほかのところで学校教育をうけ、外海で[の航海で]自分をためてみるのに十分なほど(道徳的にも知的にも)学んできているのです。かれは、子どもでも大人でもなく、ある奇妙な人生の中間点にたっています。この時期、かれは、自分自身について、また、自分のまえを通過する世界についてある程度のことを知ってはいるのですが、ただし、それらについてさらに多くのことを知りたいと思うのに十分なだけ、そのかぎりでは知らないのです。かれはまだ、かれの愛するものをみいだしていません。しかし、[自分にはない]時間や偶然的なできごとやライバルにたいする嫉妬もまた知りません。おそらく、おとぎ話のなかのきまり文句がかれにはもっともふさわしいでしょう。すなわち、かれは、自分にとっての知的なからもの intellectual fortune をさがしにやってきたのです。しかし、さらに言うと、かれは、学校から大学にやってきた最初の人間ではありません。かれは、なにを[大学で]期待すべきかということ

についてなにも知らず、したがって、大学にやってきたら、すべてのことをやさしいことばで説明してやらなければならないような異邦人のような存在ではありません。そして、かれが属していた伝統がかれにすでになにごとかを教えていたとするなら、その伝統はかれにつきのことも教えていたでしょう。すなわち、かれは、大学の三年間のあいだに、かれの知的なたかからものをいっぺんにみいだすことはないだろう、ということですが。したがって、われわれはそう想定するのですが、かれは、かれがこれから見いだすことになるものと折り合うことができるし、それを利用するこの準備ができていますのだ、と。

ところで、かれはいつたいなにを [大学で] 見いだすのでしょうか。かれが不運でなければ、かれが見いだすのは、力強いあふれるばかりの活動の流れ、学びをもとめることに従事する男たちと女たち、そして、この活動になんらかのしかたで参加するようにとの誘いです。こうした誘いは、学び [学者] の生活にはいりたいと思う気持ちにすでに動かされている人びとにも、また、そうした気持ちをまったくもたない人びとにもひとしくむけられます。大学とは何によって、学者を養成するためのしくみではありません。というのも、大学が理想とするのは、学者ばかりが住人となっているような世界ではないからです。イングランドにおいてはこの約四百年間、学者になる人間のための教育と俗人のための教育とはずっとおなじでしたし、この伝統は、大学についてわれわれがもつ観念の一部をなしています。

こうしたことにくわえて、大学は、学生にたいし、ある一定の範囲での多様な諸研究を提示し、そこからかれが選ぶことができるようにしていることがわかるでしょう。というのも、当然のことなのですが、大学は、それが教えることがらについて、取捨選択をくわえていますし、また、学者たちの注意をひきつけているすべてのことがら、学生の勉強に適していると考えられてはいないからです。[教えられるべき] 個々の科目の選択がどこからくるか、ということとはなかなか言いにくいことです。あるものは古くからあるものであり、あるものは新しい。あるもの (たとえば、医学や法律) はなかば専門的な科目のようにみえますし、他のものは、その世間とほとんど直接的関係をもちません。確実にいえることは、これらの諸研究のどれをとってみても、それらが大学のカリキュラムのなかでその場所をもつとすれば、それは、用であるような理由によるものではない、ということです。すなわち、それが専門的に有用であるといった単純な理由によるものでもなく、また、当該の知識が教えやすく、また、テストしやすい、といった理由によるものでもない、ということです。実際、[大学で教えられる] これらの諸研究のすべてに共通する唯一の特徴は、それらが、学問探究 scholarship の認知された領域であるということです。というのも、それぞれの研究には、学びをもとめることが反映されています。したがって、それぞれの研究には、それ自身の内部に、(もしわれわれがその研究の内容をふかしく飲みこむならば) [ひとを] 教育する力があるからなのです。それらの諸研究は、全体として、すくなくともその概略においてではありますが、大学のなかで遂行されている [あの] 会話を表現しています。そして学生は、自分の大学を、ひとつの声しか聞こえてこない専門学校 institute や、マニュアル化したさまざまな声しか教えられない技術専門学校 polytechnic ととりかえるようにまよわされることは決してないのです。

そういうわけで、これこそまさに、学生にとって、大学を [他のものから] きわだたせているしるしなのです。というのも、大学とは、かれが、かれの教師や仲間やかれ自身と会話することにおいて教育の機会をもつ場所であり、また、かれが、教育をつぎのようなものと混同するようながされることのけっしてない場所だからです。すなわち、職業のためのトレーニングだとか、商売のための秘訣を学ぶことだとか、将来つぎのことになる社会における特定のサービスのための準備だとか、かれが人生をきりぬけるのに役立ついわば道徳的・知的道具一式を獲得することとか、混同することのけっしてない場所だからです。この種の将来の目的なるものがすがたをあらわすときにはいつも、教育 (それにとって問題なのは個人であって機能ではありません) は、勝手口から音もなくもれさってしまうのです。それがもたらす権力のために学びをもとめることは、強欲なエゴイズムにその根をもっています。そしてこのエゴイズムは、それがいわゆる [将来学生が実現すべき] 社会的な目的 social purpose というすがたをとってあらわれるときにも、だからといって、よりエゴイスティックでなくなったり、より強欲でなくなったりするわけではありません。そしてこうしたことと大学とは、なんの関係もないのです。大学のカリキュラムのかたちには、このような意図はまったくありません。そして、大学での教えかたにも、このようなもくろみはまったくないのです。教師が関心をもつのは、生徒自身であり、生徒がなにを考えているかというであり、かれのこころの質であり、かれの不死の魂であって、その生徒がいつたいどんな教育指導者や行政官に養成されうるかといったことではないのです。

しかしさらに、大学には、以上のこととはべつに、学生に提供すべきことがあります。そして、そのことをわたしは、大学の [学生にたいする] もっとも [大学らしい] 特徴的な贈りものであると考えています。なぜなら、その贈りものは、ほかならぬ大学のみにも属しているのですし、また、はじめでもおわりでもない中間としての大学教育の性格に根ざしているからです。ひとは人生のいかなるときでも、学び [学問] の [そのひとにとって] あたらしい分野を開拓しはじめることができますし、はじめての活動に従事することができま。しかし、かれが、自分の時間とエネルギーのかぎられた資源を配列しなすということなしにこれをなすのは、大学においてだけです。というのも、大学以後の人生においては、かれはあまりにもおおくのことがらに自分をしばってしまいますので、それを投げ捨てることは容易ではないのです。大学の [学生に贈る] 特徴的な贈りものは、幕間 interval という贈りものなのです。ここにあるのは、青年期のさしせまった義務を棚上げし、しかしだからといって、その代わりになるようなあらたな忠誠を同時に誓う必要もないという、そうしたひとつの機会です。ここにあるのは、とりかえしのつかないできごとの暴君的な流れのなかでの中断 a break [息ぬき] です。すなわち、世界と自分自身についていろいろなかたで考えをめぐらし、しかしそうしているあいだに、敵の気配を背後に感じることもなく、また、決断しなければならぬというたえざるプレッシャーからも自由である、そうした期間です。また、神秘をあげながら、同時にその解決をさがす必要もない、というそういう瞬間です。しかも、こうしたことのすべてが、[いわ

ば] 知的な真空のなかでおこなわれるのではなく、継承されてきたすべての学識、そして、われわれの文明が作りだしてきた文献と経験にとりかこまれておこるのです。しかも、ひとりぼっちではありません。おなじ精神をもった仲間が同行してくれます。かれの勉強は単一の仕事ではなく、認知された学問分野を研究するためのディシプリンにとまなわられています。そしてかれの教育は、まったくの初等教育（つまり、どう行動しどう考えるかをまったく知らない人びとのための教育）でも、裁きの日 [死] にむかうひとのための最後の教育でもなく、ちょうどその中間としての教育です。こうした幕間 [としての大学教育] は、一息つくための休憩のように陳腐なものでは決してありません。もしそうだったら、そんな機会にたいしてどんな若者も「ありがとう」などと言わないだろうとわたしは思います。というのも、そうした幕間は、活動の停止なのではなく、他に類のない活動の機会だからです。

このような注目すべき機会がいつごろからできたのかを決定することはなかなかむずかしい。おそらく、(ルクレティウスが人間の手足がそうやって発生したと想像したように) さまざまな程度においてそうした機会を利用できる人びとがいたということから発生したのでしょう。いずれにしても、この機会は、ヨーロッパにおけるすべての大学が、あるしかたで、その学生たちにたいして提供しているひとつのことからです。その機会を享受するためには、あらかじめなんらかのしかたでの準備ができていなくてはなりません(たれであれ、保育園で学んでいなければならぬことを身につけていなかったら、そうした機会を利用できるとは期待されえないでしょう)。しかし、その機会を享受するために、あらかじめ存在する特権として定義されるようなものが必要であるとか、結局のところ生計をかせぐ必要がないという身分が必要であるといったことはありません。そうした機会の享受は、それ自体、「学生 student [研究する者]」であることの特権なのです。すなわち、スロー scholae (余暇) の享受なのです。あえて誤解をおそれずにいえば、この点を、大学の性格についてのひとつの理論にまで濃縮することもできるでしょう。すなわち、それを、合間 interim の理論と呼ぶこともできるでしょう。しかし、こうした理論は、かの [新学期がはじまる] 十月一日の朝、この機会が学生にどんなふう感じられるかということを見つかに表現するものにすぎないとも言えます。ほとんど一夜にして [その日の朝になってみると]、不快な事実からなる世界は溶け去り、無限の可能性と化しています。どんな「有閑階級」にも属していないわれわれは、つかのまではあっても、アダムの呪い、すなわち、仕事と遊びとのあいだの耐え難い区別から解放されたのです。われわれのまえにひらけているのは、一本の道ではなく、はてしないつづく海原です。というのも、それは、自分の帆を風にむかってひろげるのに十分なほどひろいからです。直接むかうべき目的地はなく、そうした目的地があるということからくる落ち着かない緊急性もありません。義務はもはや重くのしかかかってはいません。退屈や失望ということも、いまや意味のないことばです。死も考えることすらできません。しかし、おわりがくるということは、合間ということの性格に属しています。というのも、すべてのものには時があり、なにごとともその時をこえてはつづかないからです。永遠の学生とは、進むべき道を見失った魂 a lost soul のことなのです。

ところで、[大学教育の] 成果についてはどうでしょう。このような大学から、なんの刻印もつけずにでていく者はひとりもいません。知的には、かれは、ある知識を獲得したと想定されるでしょう。そして、それよりもっと重要なことなのですが、ある種のこの規律、ことからの帰結をつかまえる能力、かれ自身の諸能力にたいするよりいっそうの支配力といったものを身につけたと想定されるでしょう。おそらく、かれはつぎのようなことを知っているでしょう。すなわち、「意見 a point of view」をもつだけでは十分ではない、必要なのは思考 thoughts なのだ、ということです。かれが大学をでていくとき、かれがもっているのは、かれが信じていることからの真理を証明するための論拠という武器一式ではなく、かれ自身を知的フーリガンのおよぶ範囲からつれだしてくれるなにかをかれは獲得しているでしょう。そしてかれの研究のテーマがなんであれ、かれは、人類をおおきく動かしてきたことからのなにかある意味をさがしだすことができると期待されるでしょう。おそらくかれは、自分の知的な愛好の中心になるものを見いだしてすらいるでしょう。ひとことではいえない、かれが大学ですごしたこの時期は、生計をかせぐためには、それほどたいしたものをおかれにあたえはしなかったでしょう。しかし、かれがより意味のある生活をおくることをたすけてくれるためのなにかをかれはそこで学んだことでしょう。そして、道徳的にはどうでしょうか。かれが獲得したのは、道徳的な諸観念の一式でも、道徳的衣服のあるあたらしいできあいのスーツでもないでしょう。かれがえたものは、かれ自身の道徳的感受性をおしひろげる機会であり、青年期特有のやかましい、たがいに衝突しあっているような絶対的な思いこみを、もっとこわれにくいなにかとおきかえるための余暇だったでしょう。

学びをもとめることが、他のすべての偉大な活動と同様、保守的であることは避けがたいことです。大学は、風のちょっとした動きもとらえるためにたえず小刻みに揺れる小舟のようなものではありません。大学が耳をかたむけるべき批判者は、学びをもとめることに関心がある人びとであって、大学が、それがあつたところのものとはちがったなにかではないがゆえに不完全であると考えられる人びとではありません。しかし、あるしかたで、大学の観念は最近、「高等教育 higher education」とか「高等トレーニング advanced training」とか「成人のためのリフレッシュ・コース」といった知見とごったまぜになっています。これらの知見は、それ自体としてはたいへんけっこうなことです。しかし、実際においては、大学とは縁もゆかりもないものなのです。そして、そろそろ、こうした混乱を解きほぐすためになにかをなさなければならないときです。というのも、これらの知見が属しているのは、力と有用性の世界であり、搾取 [開発] の世界であり、社会的かつ個人的なエゴイズムの世界であり、その意味が、それ自身の外部におけるある些末な結果や達成によって左右されるような諸活動の世界だからです。そして、このような世界は、大学が属している世界ではないからです。それ [その知見が表現する世界] は [たしかに] きわめて強力な世界です。というのも、その世界は、金持ちで、他人にちょっぴりをだし、しかも、善意でそうしたことをやってもいるからです。しかし、その世界は、とりたてて自己批判的というわけではありません。というのも、それはしばしば、自分自身を世界の

全体ととりちがえる傾向があるからです。また、愛すべき無頓着さで、自分自身の目的に貢献しないものはなんでもあれ、いくぶんまちがっているからです。大学は、こぎの世界的な保護をうけることにたいして用心する必要があります。さもないと、大学はつぎのようないくつもの発見することになるでしょう。すなわち、世界の諸言語や諸文学を研究したり教えたりするかわりに、通訳をトレーニングするための学校に大学が「いつのまにか」なっているか、科学を探究するかわりに、電子技術者や産業に従事する化学者をトレーニングすること、大学が「いつのまにか」従事していたり、歴史「そのもの」を研究するかわりに、大学が「いつのまにか」あるべつな目的のために歴史を研究したり教えたりすることになっていたり、男女を教育するかわりに、大学が「いつのまにか」まさに社会におけるある適所「人材要請」をみたすためにかれらをトレーニングすることになっていたりする、ということです。

大学は、他のすべてのものと同様、それが属している社会のなかにある場所をもっています。しかし、その場所は、その社会における他の種類の活動に貢献するということをその機能「職務」としているのではなく、それ自身であること、そして、それ以外のものになってはならないことをその機能「職務」としているのです。その仕事の第一は、学びをもとめることです。大学において、その不在の埋め合わせになるようなものはなにもありません。その仕事の第二は、この「学びをもとめるという」活動の過程で生じてくることが「はつきり」と認められるような種類の教育です。「したがって」大学が大学でなくなるのはつぎのようなときです。すなわち、大学の学び「学問」が、今日リサーチと呼ばれるようなものに墮落してしまったとき、そして、大学の教育 teaching がたんなる教習「知識としての知識の伝達」instruction になり、しかもそれが、学生の時間の全部を占めてしまうとき、そして最後に、教えられるためにやってくる者たちが、かれらの知的なことからものをもとめてやってくるのではなく、すでにあまりにも活力をうしない疲れはてているので、かれらがもとめるのはただ、すぐに役に立つ知的・道徳的な道具一式を身につけることだけ、といったありさまになったとき、すなわち、かれらが、会話の作法をまったく理解せずにやってきて、しかし、生計をかせぐための資格や、かれらを世界の収奪にむけてときはなつための卒業証書だけはほしがらうようになったときなのです。

(了)

Michael Oakeshott, The Idea of University, in id., The Voice of Liberal Learning, Liberty Fund, 2001. First published in The Listener, 1950.